

Wool textile と Social textile を作り続ける。

それにより私たちとヒツジの間で、新しい契約を結びなおす。

#### Wool textile について

私たちの原点には常に、ヒツジやウールと共に働く楽しさと喜びがある。この楽しさ、喜びを原動力として人生を支えるための製品を作りどこへでも届ける。そのためには常にヒツジの過ごし方について考えること、さまざまな知見や技法を積極的に取り入れ製品をつくる必要があると考える。ウールはヒツジの血肉と共にある繊維であり、その繊維を扱うために人類は知識を積み重ねてきた。私たちの活動は全てヒツジとウール、人生への敬意が根底にある。

#### Social textile について

私たちとヒツジから生まれた繊維のストーリーを届ける。それは絶え間なくずっと語られているのだが声はとてみかすかで、耳を澄ませる必要がある。聞こえているのかもよくわからない声に耳を傾けていると、話していることがおぼろげにわかってきて、やがてわかってくるのは自分のストーリーである。すると他人のストーリーが読めるようになる。そして読むべきストーリーは尽きることがない。このようにあらゆるストーリーが読まれ包まれる社会をつくる。

#### 解説

この理念は誰しもが、もちろんヒツジも、もっと安寧のうちに生活できるはずではないかという疑念から書き起こした。安寧のうちに生活するためには日々の生活で何をどれだけやるのか自分で決められることが必要だがそれは難しくだいたいにおいて不可能である。誰しもがいつの間にか自分の意に沿わないことをさせられ続け迷子になっている。そしてお互いを無視し続けている。まずはせめて、自分の声を聞き取とれるようになることが必要だ。皆がヒツジを育ててウールをくしけずり、糸を紡いで布を作るようになれば良い。とても楽しく、誇りに満ちた仕事であることを私たちは知っているからだ。ただそれは結局のところ押し付けることの一つのかたちに過ぎないし、一方でここに私たちの活動が介在する場所がある。

私たちの製品はヒツジと私たちの間にある繊維を通じてストーリーを伝える。それは大変に微かで細く、おおかたの人には見えなくなっている物語だ。私たちの製品でこの微かなストーリーを身体で感じ取ると、その先にさらに、草や虫や木、川や草原、山とその先の海が見えてくる。ヒツジの後ろに落ちているたくさんの丸い粒も見えてくる。フンである。そこに自分がいる。すると隣で生活している人の声が聞こえてくる。このように他人の声がだんだんと聞こ

えるようになってくる。はずである。ストーリーという言葉も、感情と願望と来歴と欲望と祈りが混ざり合ったものとして使っている。話の筋はあってもなくてもかまわない。ナラティブと呼んでよい。

しかしヒツジは明らかに家畜であって、家畜とは自分のことを自分で決められないものごとをいう。家畜を所有する組織が自己決定を理念にするのは明らかに矛盾であって、つまりこの解説は出だしから転んでいる。

一万年前に人間とヒツジは契約を結んだ。と言われている。地球上の各地で同時多発的に交わされた契約の内容はもうどこにも残っていないが、羊飼いの直感からするとそれはおそらく理不尽な自然に対抗するために共に助け合い、お互いが生き延びるためのものだったはずだ。一万年が過ぎて人間とヒツジ、自然のパワーバランスは変化した。契約も忘れ去られた。だから人間とヒツジとの間に新しい契約を結びなおすことが必要で、私たちはそれを盟約と名付けた。私たちの活動は盟約を定めるためにある。